

第17回南のシナリオ大賞

優秀賞

魔法使いのシュークリーム

望谷まと

登場人物

白石渚（10）

松江友輔（21）

中原澄花（21）

岩永茉莉（10）

「魔法使いのシュークリーム」あらすじ

毎週水曜日、白石渚（10）は、仕事が遅

い母の帰りをあるケーキ屋で待っている。洋館

風の一軒家を改装した店はまるでおとぎ話の

世界。店主は魔法で卵と小麦粉を甘くて美味

しいケーキにする魔女で、その息子のぶつきら

ぼうなお兄さんは修行中の魔法使いだと、渚は

空想を楽しむ。お兄さんは、なぜか小麦粉も卵

も使わないシュークリームを研究していて、渚

は試食係。長崎に引っ越してから家以外で人

とうまく話せなくなった渚は、無口なお兄さん

と過ごす時間が楽しかった。ところがある日、

見知らぬ女が店にやってきた。お兄さんと親し

気なその人は、アレルギーでケーキが食べられ

ない。お兄さんはその人の笑顔が見たくて、卵

と小麦粉を使わないシュークリームを作ったの

だ。嫉妬した渚を見て、その人は渚がケーキを

まずいと思ったと勘違いしてしまう。渚が頑

張って「美味しかった」と声に出すと、お兄さん

が嬉しそうに笑った。

ランドセルを背負って走って来る

扉を二回ノックする

渚 M 「はじめに二回」

扉を三回ノックする

渚 M 「それから三回……」

扉が開き、ドアベルが鳴る

渚 M 「（息を吸って）ああ甘くていい匂い」

友輔 「いらっしやい、渚ちゃん」

渚 M 「ふふ、お兄さんのエプロンに白い粉が

いっぱいついてる。また練習中かな？」

友輔 「ミルクティーやったな」

振り子時計が秒を刻む音

友輔「ああ、おやつ食うか」

渚M「お兄さんのケーキは薄い茶色で、うーん

渚M「壁に小鳥が動く振り子時計、天井にはお

渚M「ぶつきらぼうなお兄さんは、魔女の息子

花のランプ、窓はカラフルなガラスが不思議

で修行中の魔法使い。なんてね、ふふ、こん

な模様になっていて、窓際に長いテーブルと

な空想はお兄さんにはヒミツ」

形が違う椅子が3つ」

友輔「ああ、やつぱ微妙か」

ケーキ皿をテーブルに置く

椅子をひく

渚M「ああ、いつもそう。声に出さなくても、お

友輔「これは、母さんのココアとアーモンドのシ

兄さんには私の気持ちかわかつちゃう。本当

渚M「猫の耳がついた椅子が私のお気に入り。

フォンケーキ」

に魔法使いなんじゃないの？」

おとぎ話のお家みたいなここは、ふふふ、魔

法使いのケーキ屋さん」

渚M「長崎の学校で初めて話しかけてくれた茉

ボールでケーキの材料を混ぜる音

莉ちゃんが、『ケーキを作る人はパティシエ

厨房からボールで材料を混ぜる音

と言うとよ』と教えてくれた」

渚M「それからまた、お兄さんはケーキの練習。

私は絵を描いたり本を読んだり。来週はどん

渚M「こっそり店の奥を覗いてみた。あ、今日

ケーキ皿をテーブルに置く

なケーキかな」

は魔女のおばさんがいない」

友輔「こっちは俺が作った。感想聞かせてや」

学校のチャイムの音

振り子時計のカッコウが鳴く

放課後の生徒たちの声

ケーキを食べるスプーンや食器の音

茉莉「わあ、渚ちゃん絵うまかね。……それあの店のケーキ？ あの坂の途中の。……ええなあ、あのお店のケーキは美味しそうやけど、茉莉は食べられんとよ」

ランドセルを開けて手紙を取り出す音

茉莉「お手紙くれるん？ 後で読むな。……なあ渚ちゃん、家では普通に話すとやろ？ 茉莉とも口で話さんか」

渚M「あ、何か言わなきゃ、言わなきゃ……」

茉莉「あ、ルミちゃん、一緒に帰る。渚ちゃんじゃあね〜」

渚M「ああ、また何も言えなかった。長崎に来てから、家の外ではずっとそう」

ランドセルを背負って走る

渚M「水曜日はお母さんが仕事で遅いから、魔女の店で待つことになってる。ふふ、お母さんの友達が魔女でよかった」

扉を二回ノックする

渚M「はじめに二回」

扉を三回ノックする

渚M「それから三回。水曜はお店がお休み。だから、これが秘密の合図ねって、お兄さんが教えてくれた」

扉が開き、ドアベルが鳴る

友輔「いらっしやい、渚ちゃん」

渚M「ふふふ、扉が開く魔法みたい」

友輔「あれ、傘持つとらんかった？」

渚M「雨？ 走ってきちゃったもん」

友輔「濡れたままだと風邪ひくけん」

タオルで頭を拭く

渚M「お兄さんがタオルで髪を拭いてくれた。お兄さんには、何も言わなくてもいい」

鼓動の音

渚M「心臓の音がする……」

友輔「すごか音やね」

渚M「え！ お兄さんにも聞こえちゃった？」

雨が窓ガラスを打つ音

敗した。えっと今日のが……」

扉が開いて、ドアベルが鳴る

友輔「雨、すごかね」

友輔「これ食べるの、七回目やった？」

風が吹き込む

渚M「はあ、なんだ雨か」

包み紙を捲る音

友輔「おう、いらっしやい！」

友輔「さて、今日のおやつは何やと思う？」

渚M「シュークリームを半分に分けると、ふわふわの生地が包んでいたクリームがトロツと溢

澄花「よかよか。澄花、こつち座って」

渚M「あれ？ 今日のお兄さん変、いつもより

わの生地が包んでいたクリームがトロツと溢れでた。ああっ、慌てて口を近づけてクリームを吸い込んだ」

澄花「あ！ 渚ちゃんよね？」

何だかお喋り……」

渚M「うわあ……」

渚M「お花屋さんみたいな匂い……。ふんっ、さては悪い魔女だな！」

ケーキ皿をテーブルに置く

友輔「クリームは豆乳で作ったんよ、生地は米粉。……どがんね？」

澄花「友輔がね、秘密だから来るなって、なか

友輔「みんな笑顔になる魔法のシュークリーム、

なんてな」

なか渚ちゃん紹介してくれんけん やつと会えて嬉しかよ！」

渚M「お兄さんは、卵も小麦粉も使わない

シュークリームを作ると言って、もう何度も失敗してる。うまく膨らまなかったり、クリームがボソボソだったり、何度も何度も失

澄花「よかねえ、渚ちゃん、私、友輔のケーキ食

ベたことなかとよ」

友輔「あー、それ、その顔、見たかった！」

澄花「よかねえ、渚ちゃん、私、友輔のケーキ食

ベたことなかとよ」

渚M「ふふふ、このままずっと、口の中のクリームが溶けなければいいのに」

澄花「よかねえ、渚ちゃん、私、友輔のケーキ食

渚M「ふうん」

澄花「それでも友輔のケーキの話はめっちゃ好き。友輔は本当にケーキが好きやろ。作るのも食べるのも、せいけん一緒に食べるとる気分になれるとよ」

渚M「食べたことないのに？ 薄茶色のケーキは不思議な味だよ。パッサパサのものもあるよ。私いっぱい食べたことあるもん」

澄花「私な、卵もだめ、小麦もだめ、食べられないの。アレルギーってわかる？」

渚M「アレルギー？……知ってる、それ。茉莉ちゃんの給食は、みんなと違う容器に入ってる。クリスマスのケーキも茉莉ちゃんだけ違う色をしてた」

友輔「なあ澄花、食うてみんね？」

澄花「え？」

友輔「一緒に食いとーて作ったとよ。澄花が食べられるんを」

澄花「本当に？ 私、食べられると？」

友輔「すぐ用意するけん、待つとつて、なすぐやけん」

振り子時計が秒を刻む音

渚M「口の中のクリーム、なくなっちゃった」

澄花「あ、クリームついとる、渚ちゃん、そこ、私

ティッシュ、持つとるよ」

ティッシュを袋から引き出す

澄花「ふふ、拭いてあげる……よし、取れたよ。

美味しかった？」

渚M「あーあ、舐めちゃえばよかった」

澄花「あ、その顔、もしかして微妙やったと？」

おばさんからもまたOKもらえないって言う
とつたけんなあ」

渚M「え？ 微妙じゃないよ。そんなこと思っ
てない。ねえ、違うよ」

振り子時計の秒を刻む音

澄花「まあ懲りずにまた食べてあげてな」

友輔「何を懲りずに食べるって？」

渚M「違う！ 違うよ。お兄さんあのね」

振り子時計のカッコウが鳴く

渚「美味しかったよ」

友輔「渚ちゃん、今、声……」

渚「お兄さん、あの……」

友輔「うわあ、渚ちゃんの声やあ！」

渚「あ、あ……」

友輔「あごめん、騒いでごめんよかよかゆっくりでよか」

澄花「友輔ずつと言うとったもんね、渚ちゃんに美味しいって言うてほしいって」

友輔「それは顔見たらわかっつたけど」

渚「とつても美味しかった」

友輔「あはははっ！……もう一個、食う？」

渚「食べたい」

友輔「みんなと一緒に食べようや！」

シュークリームの包み紙を捲る音

澄花「(食べて)うわあ、これあと三つは余

裕で食べられる！」

渚「ちよつと」

澄花「渚ちゃんも二個目やろ」

渚「ついで、クリーム」

澄花「ん？ どこ？(舐める)」

渚「あ、舐めた！」

澄花「へへ、だつてずつと我慢しとつたとよ優

秀な試食係のおかげやな」

友輔「あはは！ これからも頼むわ」

渚「うん！」

三人の笑い声 (FO)

ランドセルを背負つて走る

茉莉「お母ちゃんがな、食べてもええつて！ほ

んまに茉莉も同じの食べられると？」

渚「うん、だつてね」

扉を二回、そして三回ノックする

渚「魔法使いのシュークリームだから」

扉が開き、ドアベルが鳴る

(了)